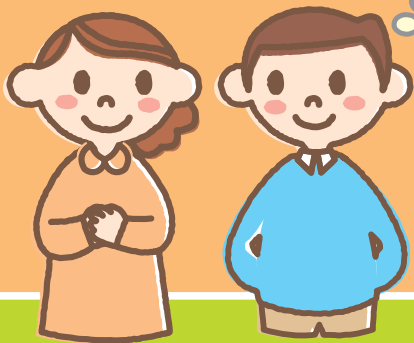


あなたにも いつかやってくる その時

特集 漫画家 ごとう和さんを囲む座談会

人生 出口のないトンネルはない

親族などを介護した経験はない **58.7%**



いっしょに長生き…しようね



おじいちゃんも
おばあちゃんも
まだまだ元気…

33.9% 介護されるなら配偶者がいい

たまに老いを意識することがある **56.2%**



オシ、
更年期???

47.9% たまに死について考えることがある

●このデータは、平成19年6月～8月に、121名（男性46名 女性75名）を対象に実施した「男と女の老い支度」に関するアンケート調査の結果をもとにしています。

男女共同参画へ一歩いっぽ。〔パ・ザ・パ〕

Pas à pas

No. **9**

2007 OCTOBER

人生 出口のないトンネルはない

●誰もが 自分らしく生きるために
いまを よりよく生きるために

■病い・老い・死について考える



だれもがいつか迎えるであろう老い、そして死。私たちは、どのように受け入れ、歩いていったらいいのでしょうか。漫画家ごとう和さんのご経験やターニングポイントをのりこえられたお二人のお話を伺いました。

出席者

のうど え
納土 みつ江さん
静岡県健康生きがづくり
アドバイザー協議会理事

いしづき なか
石月 中さん
元特別養護老人ホーム
「聖ヨゼフの園」施設長

かづ
ごとう 和さん
漫画家

司会 女性会館運営協議会会長 木村 幸男

●予期せぬ告知では

なかったけれど

司会：告知があった時は、どんなお気持ちでしたか？

ごとう：2002年ぐらいに、手が震えるので脳の専門病院で調べてもらいました。なんともないというので、きっと運動不足なんだ、よかったと思いました。それでも震えは止まらないのでおかしいなと思い、日赤の神経内科へ。そこで、「パーキンソンだと思えます」と、若い医師から言われました。脳の検査でもなにも出てこないというのが特徴で、はっきりわかるのが、強い薬で震えが止まるとか、遺体を解剖した時に脳細胞が変化しているなど、だそうです。

司会：予期せぬ告知ではなかったのですね。

ごとう：そうです。すごく明るい先生で、「大丈夫。パーキンソンで死ぬ人はいません」と。だから、そのときは、さほど落ち込みませんでした。

人によって病気の進み方が違うんだったら、じゃあ私はもう10年仕事したい。そのためにはどうすればいいのか、なっちゃったものはしょうがないや、と切り替えは早いんです。嘆いて治るんだったら嘆くけれど、ひゃー、難病か。難病法蓮華経なんてだじゃれが出てくるくらいで…。(笑い)

司会：よい先生と出会われたわけですね。

ごとう：はい。今、診て下さっている先生もこちらの気持ちを大事にしてくれて感謝しています。あとは、どうすれば進行がゆっくりになるか、ということですね。パーキンソンが治る本というのがあったので、それを買って読んで。鍼が効くと書いてあったので、行ってみたんです。最初、少しはよくなったんですけど、めまいもしてきました。朝起きるとき、すっきりしないのがひどくなって、寝返りも打てていないように感じたのです。からだの動きも悪くなっているような気がしました。

司会：それで、どうなさいました？

ごとう：こういうのが「うつ」なのかな、と。そのうち、ふつうに仕事していても、顔が震えてくるのです。それでも軽い薬でちょっと治まっていました。そんなある日、友人がリンパマッサージに誘ってくれました。そして、その先生から勧められて、足つぼマッサージを何回かやってみたら、頭がほんとうにすっきりしたのです。歩くのも楽になり、最初の1か月は毎日通い、そのあとは1週間に3回にして、今は1回から2回になっています。つぎに先生に誘われて、体操教室に行ってみました。思いのほか、最初からけっこう動けました。すると先生は、「来年の夜桜乱舞の踊りにでよう」。無理だろうと思いましたが、この体験をマンガに描くなら、盛り上がりがあったほうが面白いんじゃないかということで、金曜日はストレッチとかウォーキング、水曜日の夜は踊りを習って、週2回身体を動かすことにしています。それが体調維持にほんとうに効いているんですね。

●話してしまったほうが ラクになれる

司会：いい出会いをされている、と感じますが、それは偶然ですか？

ごとう：うーん。どうなんでしょう。「これ、いいかも！」と思えば続けてみるし、「違うな…」と思えば手放します。お金がかからずに体調がよくなり、進行を遅くできるのであれば、そういう情報をマンガでも伝えられたらいいな、と。体操だったら家でもできます。あとは散歩ですね。これが一番いいような気がします。でも、振り向いて後姿を見られていたらいやだなと思うことが一番しんどかったかな。

司会：お子さんにお話しになられたのは、ちょっと時期がたってからでしたね。

ごとう：そうです。いっしょに暮らしていなかったのです。心配かけてしまうから、電話で話すことではないな、と。

ごとう
和さん



司会：まず、身近の親しい方に話されたのですか。

ごとう：近所でなにかとお世話になっている友人に、最初に話をしました。病院から帰ったら、「どうだった」「当たっちゃったよ」「困ったことがあったらやれることはなんでもやるから」と。

司会：だれかに話すとラクになりますか。

ごとう：はい。仕事のスタッフにも、すぐ話しました。近所や隣の奥さんにも、こうだったんだよなどと。でも、楽になったかということ、ちがうような気もします。でも、黙っていて、あの人ちょっとおかしいと思われるのがいやなのね。だったら、言ってしまおう。

去年はたまたま、町内会の組長だったんです。どこまでやれるかと思いましたがみなさんに話しておいたほうが、自分がラクになれると思いました。何か常に自分優先で恥ずかしいです。

●マンガを描いて 生きる姿勢ができた

司会：もともと開放的でおおらかなご性格でいらっしやいますね。

ごとう：自分のことでもマンガに描いてしまうような性格です。最近は、案外「ネクラでは…？」と思っています。

司会：これをマンガに描こうと決意なさったのは、どうしてですか。

ごとう：読者体験を元に「エンジェル日誌」という作品を描きました。病気・不妊・家族のことをいろいろと…。そして、自分が病気になってそれを描かないのもおかしいなと思って。

司会：前向きな姿勢？



石月
中さん

ごとう：この先ぼっくり逝ければいいけれど、自分が動けないまま生きていくことに耐えられるのかな、と考えるのが、一番辛いかもしれません。でも自分に起こることは全て「メッセージ」と思っていますので、この「病氣」は私に何を伝えようとしているのか。そのあたりもこれからのテーマですね。

司会：闘うというのではなく？

ごとう：病氣になったことで、一番好きじゃない言葉は、「闘病」です。なってしまったものはしょうがない、情けないな、というのがあります。自分のからだをこんなことにしてしまって申し訳ないなと思うのですが、これにもなにか意味がある。そこからほぐしていけば、治らないといわれているけれど、なにが起こるかわからないから、それを楽しみに生きている。治らないでもともと、治ったらもうけもの、ってというのがすごくありますね。

司会：悲愴感はないのですね？

ごとう：そうですね。私、鈍いのかしら。(笑い)

司会：でもお仕事を持っていたらよかったのは幸運でしたね。

ごとう：そうかもしれません。自分が経験したことをいろいろ描いてきたのですが、たとえば離婚のことを描いてきた時、それでくよくよと落ちこむのではなくて、どうすればよりよく生きられるか、という訓練ができてきているのかな。他人の体験をいただいた時も、そのまま描くのではなくて、読んだときに勇気が出たり、前向きになれるように描いてきたつもりです。マンガを描いているうちに、自分の生きる姿勢ができていったのかもし

れません。

司会：親友やアシスタントなどの反応が、よかったのですね。

ごとう：そうですね。スタッフは、「先生おかしいよね」と、ひそかに心配していたらしいのです、何年も前から。でも、私が平気で歩いていたので、余計なことはいわないでおこうと。やっぱり周りの人たちに恵まれていた、というのがあるかもしれませぬ。

司会：本人より落ち込む人だっていますものね。

ごとう：そうですね。

司会：夜、眠るときなど、いかがですか？

ごとう：病氣若葉マークの頃は、落ちこむ夜もあったかも…。でも今は、昼は仕事に集中し、夜は大好きな漫画を読んだり、サッカーのテレビ観戦とか楽しい時間を過ごし、ベッドに入るとボタンキューですね。うちのスタッフも「この人は落ちこみません」と。あまり深く考えられない頭なのかも。

●なにかが

涙といっしょに溶けていった

司会：さて石月さん。これまでご本人のお話を伺って、いかがですか？

石月：「ぴんくのハート」には、生きていくうえで栄養になる、心の中へ響く言葉があちこちに出てきますね。ごとうさんは、通り一遍の楽道家ではないというか…生きるということをしっかり見つめていて、苦しみもなにも乗り越えた後の、ある境地に達しておられる。苦しかった事もいっぱいあったはずなのに、それを乗り越えたものを漫画を通じて、迷っている小羊たちにサインを送ってくれている、そんな気がしました。

司会：その心に響いたことばを、なにか。

石月：たとえば、「病が肉体に現われた時、それは克服するものではなくて経験すべきものとしてつきあってください」。スーパーで店員さんに声をかけられた場面で、ごとうさんは、「私はそん

なに優しくありません」「離婚もし、子どもにも身勝手なことをしてしまいました」。自分をさらけ出すことによって、安心感みたいなものが出てきているのかな。自分の内側を出すことができたから、「甘えたら何かが涙と一緒にとけていったような気がする」ということばが出てきたんでしょね。

司会：「甘えるのはずっと苦手だった」とも。

ごとう：みんな実際にあったことなんです。不思議なことに、世の中ってというのは、自分に必要なものは、だいたい現れてくれる。そのスーパーの店員さんも深い方なんです。心を開いた時に、はじめてほんとうの交流ができる。なんで私は、スーパーで泣いちゃうんだと思いました。甘え方が下手っていうのかな、親にも甘えることはなかった。でもほんとうは、泣くことが一番自分を癒す力になるんですね。他のことでは泣くのに、病気の時には泣けなかったです。もしかしたら、それだけショックだったのかもしれない。泣いてる場合じゃないよなって感じがあったのかな。

●病を抱えて生きる人に 勇気を与えたい

納土：素晴らしい出会いだと思います。先生はこれを描くことで、ご自分を客観視というか自分ではない人とし、ご自分をみつめることがおできになっている。

ごとう：どこか離れたところから見ていたい、畏れ多いですが悟りたいという思いがあるんですね。難しいけれどすこしずつクリアしていくしかないな、と思いつつ生きています。

司会：同じような境遇の人、病を抱えて生きる人に勇気を与えたいというのがすごいです。

ごとう：いや、それは違います。病名を告げられてからの1年半を淡々と描いて、私の場合は「こうだった」とただ伝えたかったのです。そして参考になればうれしいと。だから今後も、描くチャンスがあれば描くと思いますが、どういうふうに

納土
みつ江さん



描くのかは、まだわかりません。病状が変わると自分の感情も変化するかもしれない。メモはしていますが、これとは別の作品になる可能性もありますね。

**司会：「難病」とか「不治の病」といった言葉は
どうなのでしょう。**

ごとう：「同じ病気の人といっしょにいと、ほっとする」「健康な人といると、なにか自分の身の置き所がないようでさびしい」とおっしゃる方もいます。同じ病の人たちと「難病でもう治らないんだから、美味しいもの食べて楽しくやろう」という話になるんだよね」という話を聞いた時には、ちょっとショックでした。私としては、「難病」、「治らない」、そういう言葉は使いたくない。この宇宙では何が起こるかわからないと思っているので、そういう否定的な言葉は…。

**司会：病は気からといいますが、嘘じゃないんだ
と思えてきます。**

ごとう：リウマチで車椅子の方が、認知症になられたら突然歩きはじめたという話があります。歩けないという記憶がどこかいったので、スタスタ歩いたということ、メールで知りました。私もなにも考えない時は、なんだか動きがいいんです。常にそういう状態になっていければ、しめたものと思う時もありますね。

**司会：寝たきりのお年寄りでも、ケアの仕方によって
起きたり、歩いたりできるようになると聞きますね。**

●大変だったね でもここにいれば大丈夫だよ

司会：では、早めに公務員を辞めて特別養護老人ホームの施設長になられ、今年の3月にそこを退職なさった石月さん。そのいきさつなどを。

石月：ちょうど1年前、まだ老人ホームで働いていた時、夜突然、胸のあたりが痛くなりまして、診断してもらったところ、心筋梗塞。その場で入院・手術ということになりました。手術を終えて、車椅子に乗せられて安静室から病室に帰る途中、医師や看護師に対して、すごく失礼なことを言ったようです。半分覚えています、「なんでこんなに親切にされ、車椅子を押していただいて、自分がこんなところに居るのはどうしてなんだ。」麻酔がちょっと覚めてきた時でした。ふだんの生活は、お年寄りのお気持ちを察したり、背中をなでたり、寝ている方をお見舞いしたり、車椅子を押したりでした。それが逆になって、みなさんから温かい声をかけられて、変だなあと。そんな自分が許せないというか。信じられなかったんです。後で考えたんですが、「死」は突然やってくるだろうし、一年前の胸の痛みがもう少し大きかったら逝ってたんだろうな、と。そして、病気になるということは、人から介護され、親切にされることなんだとはじめてわかってきました。

司会：これまた経験のたまもので…。

石月：もうひとつは、7年間老人ホームにおりまして、100人くらいの方々をお送りしているんです。いまのお年寄りは、第二次世界大戦を青春時代として過ごし、道端に生えている草を食べるようなご経験をしておられます。支えるご家族のお気持ちも含めて、安心して生を全うしていただくにはどうしたらいいのかを、常に考えさせられました。できるだけ、お話を聞いてさしあげて、胸につかえているものを出して、安心していただく。最期には、手を握って、暖かくなるように、また安心できるようにとケアしてきました。これ

は個人的なことになりますが、妻の母親を家で引き取ってお世話することになったんです。自分の両親の介護のときは、まだ子育ての最中で充分にしてあげられなかったのが、最後に自分にできることをさせてもらおうと。そうした介護を見て、子どもたちはどう感じてくれるのか、自分が逝くときは頼むよという気持ちになっていたのかもしれませんが。

司会：100人もの方々をお送りするというのは、大変なことですね。

石月：昼間だけではなく、夜中も早朝もあります。できるだけ最期はそばにいてさしあげたいという気持ちだったので、四六時中緊張していました。100の人生に出会えたというのは、すごい宝になりました。

司会：いわゆる傾聴ボランティアのような…。

石月：話を聞いて、ご一緒に涙を流して、大変だったね、でもここにいれば大丈夫だよ、安心だよと。

ごとう：施設を選ばれたのは、もともとそういう思いがあたりになってですか。

石月：自分が子育ての最中に、両親を亡くしていて。7人兄弟の6番目ですから、親が比較的高齢の時に生まれて、両親を早く失いました。自分は親になにもしてあげられなかったという気持ちがある。だから、老人ホームにおられる方に尽くせないかと思ったのです。でも、そんな大それたことじゃないですよ、できたことは。

ごとう：入居者のご家族は？

石月：いる人もいるし、いない人もいるし、お葬式も親族が2人くらいしかいない場合もあります。それも孫2人とか…。今のお年寄りは長生きですから、お子さんのほうが先に亡くなるケースもあります。

●「あなたの笑顔に会いたいわ」という言葉

司会：さて、納土さんはパートナーを事故で亡くしておられますが。

納土：立ち直るのに3年かかりました。今でも命日がくると落ちこみます。その日は一人では過ごせません。その日が近づくと、今でも胸が苦しくなります。

司会：9年前でしょうか？

納土：いえ、10年目になります。夫と、「老後はこうしよう、ああしよう」と話していた矢先だったものですから、深い深い穴底に突きおとされた感じで、眠れない、食べられない、呼吸もできないというような感じでした。

司会：それはたいへんなご経験ですね。

納土：これは経験しないとわからないことですが、そんな状態にもかかわらず、やらなければならない事務的なことが、次から次にあるわけです。でも、私の頭の中は真っ白。兄が心配しまして、「とにかくノートを一冊作れ！最低でも自分が今日やったことを記録しろ。誰から電話がかかってきて、どう答えたか。どこにどういう書類を出したか。誰と何を話したか。全部記録しておきなさい」。大事な用件の時には、姉が傍らに必ずついてくれまして。まるで夢遊病者みたいな生活をしていました。それはもう、出口のないトンネルの中にいる感じでした。具合が悪くて病院に行きたくても、次の日から夫の保険証は使えないんです。

司会：えっ？

納土：使えないんですよ。それをするためには、国民健康保険に切替える手続きが必要で、手続きしていないと実費支払いになります。後から戻ってきますけど。だから説明する気力がなくて病院にも行きませんでした。で、息が苦しくなった時、知り合いのマッサージ師さんに身体をほぐしていただいたのですが「あんた、内臓、死んでますよ！」。趣味のグループの仲間には、夫を亡くさ



れた先輩方がいっぱいおられます。その方たちが電話や手紙をくださいました。その中にこんなハガキがありました。「風邪引いてない？無理しちゃだめよ。今は心とは関係ないところでやらなきゃならない事務的なことがあるよね。私も暑い最中に、そんなことやってみたい。でも、無理しちゃだめよ。食べることと寝ることは手抜きしちゃだめよ。後は気の向くままに生きなさいよ。時を待って、時を待って、気の向くままにすればいいよ」。そして最後に「あなたの笑顔に会いたいわ」。それだけのことだったんですけど、すごく気持ちが楽になりました。

司会：いい言葉ですね。

納土：「がんばって、がんばって」って声をかけてくださるのはうれしいのですが、当時の私は、なにをがんばったらいいの？って。兄、姉、子どもたち、お友だち、ほんとうに大勢の方に助けられました。同居していた夫の母親はそういう私を見て、落ちこんではいけないと思ったのかとても明るく振舞っているんですよ、不思議なくらい。それで私に、「外に出なさいよ」と。何か月かして近所のスーパーに行った時、「大丈夫？元気がなったね」とみんな寄ってきてくださるんですね。でも中には「よかったわ。あなたってなんて立ち直りが早いんでしょう！」とか、当時のことを根ほり、歯ほり聞いてくる人もいました。それで、もう近所のスーパーに行くのがすっかり嫌になって、買い物はすべて遠くのデパートの地下とか。

●誰かがわたしを見守っていてくれる

司会：人に会うのが苦痛になられて…。

納土：そうです。そういったことの繰り返しで1年過ぎました。お葬式、通夜の時も、自分の身に起こったことがどうしても信じられないのは、受け入れたくなかったからだと思います。法事で誰をお呼びするかと話していたとき、「そうねえ、パパが帰ってきたらパパに相談するよ」。スーッと、言えちゃったんです。

ごとう：ああ…。

納土：姉が「あんた、なに言ってるの！」ってポロポロ泣き出して、そこで、私は、はっと気づいたり。一番悲しかったのは、一周忌が過ぎてお客さまが帰られた時に、「ほんとうに死んじゃったんだ！私、夫のところに行こう」と思いました。そのくらい辛かったです。

司会：そうでしたか。お元気な納土さんしか存じ上げてなかったのですが。

納土：それからどのくらい経たでしょうか。「どこに行っても、かわいそうな納土さん」の世界から抜け出さなくなりました。ありがたいんですけど、自分は悲しそうにしてなくちゃいけない、明るくすると「立ち直りが早いね」とか言われる。わたしを知らないところへ飛びこみたいと思うようになりました。

司会：それが市民活動だったのですか？

納土：それも、ひとつですね。まずは「いのちの電話」の相談員養成講座を受けました。でも、とても他の方のカウンセリングができる状態ではないわけです。それでカレッジⅣ（静岡市女性カレッジ4期の有志で作った自主活動グループ。ジェンダーかるたを作成）で活動したり。とにかく、私のことを知らない世界のほうがラクになりました。

司会：なるほど。

納土：恵まれていたのは、誰かが、常に私を見守

っていてくださったってことです。人間一人では生きられないと、つくづく思いました。いろいろな方からお手紙や本をいただきました。その中でこんな言葉に出会いました。「夫は、最後にわたしに大きなプレゼントをくれました。それは自由というプレゼントです。このプレゼント、夫からいただいた宝物です。これから、自由というプレゼントを大切に生きていこうと思います」。たった2行くらいですがこう思えば前向きになれるということに気がついたのです。

ごとう：お話をうかがって、ほんとうにいいご夫婦でいらした…と。

司会：事故に遭われたのはおいくつでいらっしゃいましたか？

納土：55歳でした。

ごとう：ギクッとしました。私も今、55歳。結婚なさってから亡くなるまでごいっしょに幸せにいられて、なんとも羨ましいと思いました。何年間は苦しまれたとは思いますが、そこもまた、たぶん私にはできないと思うけれど、すごい。すごいって言い方もおかしいんですけど。

納土：姉も、なぐさめのつもりで言ったんでしょうけど、「あんたたち夫婦は、私たち夫婦より結婚年数が短いんだけど、密度が濃い、いい夫婦だったよね。楽しんでいたよね、幸せな時を送ってきたんだよ」って。今はうれしい言葉ですけど、当時はそう思えませんでした。

司会：ごとうさんのご経験もそうですが、やはりお話をうかがわないと、わかりやすいですね、人間って。

ごとう：そうですね。私、常々、人と話すことというのは、ワークショップだなと思うんですよ。それぞれがすごく深い人生を送られている。お互いにとって財産なんですね。石月さんは、それを施設で経験してこられたと思うし。人と出会うことは大事なんだなと思いますね。

●人生

出口のないトンネルはない

司会：若い世代は老いや死を考えるとどこか、育児や家事に追われている毎日だと思いますが、その人たちに、なにかメッセージをお願いできますか？

ごとう：そうですね。自分が病気になって一番思ったのは、身体を動かすことが一番大事だと。こころと身体にいい影響を与えるでしょう。散歩するだけでもいいんです。自分の足で歩くこと。まだ若い人にはピンとこないかもしれませんが。そして、常に隣の人と心を開いて語ろうと。

司会：自分から開いていくこと？

ごとう：相手を待つのではなく、せっかく出会ったのだから自分から心を開いていかないと。お互いにもわかりあえないまま離れていってしまうのは残念ですから。

司会：身近すぎると逆に難しくはないですか？

ごとう：そうですね。でも、それが生まれてきて一番大事なことのような気がする。そこをやらないう限り、いくら他の人とやっても意味ないかもしれないとも思いますよ。まずは自分の家族、そして隣りの人。

石月：人間は苦しんだり、苦労したり、喜んだり、生まれてから亡くなるまで、いろんなことがあります。それは決して無駄にはならないということです。願っていること、希望というのは、どこかで実を結ぶんじゃないかと思っています。息を引き取られた方が例外なく、今まで見たこともないような安らかな良い顔をされるのを見て、強くそう思います。

納土：「パザパ」の読者が30代、40代とするならば、そんなことは想像しないでしょうけど、なにか自分に不幸なことが起こった時には、絶対にトンネルは抜けられるよ、もがかなくてもいいよ、ううん、もがいていてもいいよ、無理しなくていいよ、自然体でいいよ、泣きたい時は泣いて、そ



したらいつかは必ず抜けられるよって、お伝えしたいです。

司会：出口のないトンネルはない、ということですね。

納土：はい。それと、もうひとつは老後の3大課題として、「貧困」・「老化」・「孤独」があるといわれます。「貧困」というのは経済。経済はこれからの時代、自助努力で、自分で努力してクリアしていく方法を考えていかなくちゃいけない。「老化」というのは、考え次第ですよ。もうちょっと前向きにしていこうという考え方でずいぶん変わっていくと思います。人生、生きがいを見つけることが一番大事です。50代、60代になってから意識するのではなくて、仲間作りというのは、早いうちから準備していく。それを通して、自分の生きがいを早くから見つけておくことが、誰にもくる老後の準備として大切ではないかなと思います。いつか必ず来る老後ですから、若い時からいろんな方法で心がけておこうね、ということをお伝えしたいですね。

司会：今日は3人の方々から、普通ではとても話していただけないような、たいへん貴重で、非常に勇気づけられるお話を聞かせていただきました。ほんとうにありがとうございました。

出席者 プロフィール

ごとう かず 和さん

漫画家。2005年12月にパーキンソン病と診断される。1年半の体験を、「びんくのハート」（月刊フォアミセス7月号 秋田書店）で発表した。55歳。駿河区在住。

いしづき なか 石月 中さん

元特別養護老人ホーム「聖ヨゼフの園」施設長。66歳。清水区在住。

のうど みつゑ 納土 みつ江さん

静岡県健康生きがいづくりアドバイザー協議会理事。61歳。葵区在住。

チャレンジ レポート

海野 フミ子さん
(アグリロード美和代表)

起業、NPO活動、地域活動などで輝いている女性やグループに贈られる女性のチャレンジ賞。平成19年6月25日に総理大臣官邸において男女共同参画担当大臣表彰を受けられた、アグリロード美和代表 海野フミ子さん（葵区在住）にお話をうかがいました。



受賞された感想は

10年以上にわたる静岡市農協女性部の女性の参画への取り組みの成果だと思っています。1つひとつステップを踏みながら女性が進出してきたことが認められたということで、私ひとりの力ではなく、組織の大きな力だと。授賞式では、東京という巨大なもの、それも自分がとても足を踏み入れられないところに今いるのだと思い、緊張しました。年齢的にこれから華やかな場所はどんどん減っていくでしょう。普通の人でもがんばればいただけるということをおみなさんに知ってもらいたいです。

アグリロードの生き立ち

平成8年ころ、安い輸入農産物が大量に入ってきた時期でした。農家の生活が圧迫されるという心配が。加えて、テレビで、輸入漬物が横浜港に炎天下に野ざらしにされている風景を見たのです。半信半疑で見に行ったら、2、3年も前の包装なのに、ぜんぜん傷んでいないのです。変質や変色するはずなのにおかしい。安全な農産物加工品をつくらうと。それで朝市をはじめました。野菜のほかに、余剰米を農家から買って、弁当に

したり、かしわもち、きんつば、かぼちゃケーキなども。最初は、すごく恥ずかしかったのです。お金をもらうのがみじめな気がして。今ではそのように思っていた自分が恥ずかしいですが。たくさんのお仲間がいたからこそできました。ここは、出荷する人、加工する人、レジ担当、みんなのお店。それぞれがいろいろな分野で働いています。ナスひとつをつくるのにどんな苦勞をしてきたかを知っているからお互いをいたわりあえる。農業の大変さを知っている人たちだから。

まずは体験することから

現在は、生消費言倶楽部（せいしょうなごんくらぶ；生産者と消費者が野菜について語りあう）という活動も。6、7年前、無農薬の野菜が脚光を浴びた時期がありました。曲がっていても無農薬がいいと。実際には、値下げしないと売れなかった。なぜ農薬が必要なのか、なぜこの値段になるのかを実際に体験して知ってもらおうと思って。体験では大豆を栽培し、味噌づくりをしました。大豆は無農薬ではなかなか収穫できません。試しに無農薬で少しだけ作りましたが、結局ほとんど全滅。消費者が豆をまき、草取り・土寄せをして、収穫。味噌にして「これで650円ならアグリロードの味噌は安い」と。体験してみなければわからないことですね。

男性の協力

かつて農村では男性が家事をすることはタブーでしたが、今はかわりましたね。家事はもちろん、旅行などにも気持ちよくだしてくれるように。ア

グリロードには女性のみが出荷できますが、最近では搬入を手伝う男性も多くなりました。

5年前までは市農協（正組合員10,463名）の総代（502名）は、全員男性だったのですが、今では20%が女性に。ここ美和地区では、33パーセント（45名のうちの15名）が女性。家庭のなかだけでなく地域でも認められたといえるでしょう。

新たなチャレンジへ

これからは、地産地消に力を入れたいと考えています。特に地産、つくるほうを。たとえば、フキは、ふきのとう、きゃらぶきと無駄になるところが全くありません。昔あった産地を見直したい。それには女性がまずやり始めたいのです。新しいものを開拓する力があると思うから。ものになってくると男性が手伝ってくれる。そうなればしめたもの、どんどん広がるでしょう。静岡の人には静岡でとれたものを食べてもらいたい。地産を軸に女性の力で農業振興させたいです。



平成19年6月25日撮影



JA静岡市女性部販売所 アグリロード美和

営業時間 月～金 9:30～15:30

土日祝 8:30～15:30

(1月1日～1週間ほど休み)

葵区安倍口新田537-1

TEL. 054 (296) 7878

企業等へ講師を派遣する事業「出前講座」を実施しています。

bulletin board



**男女共同参画を本当に理解
するために**



**セクシャルハラスメント
防止講座**

のほか、企業等における男女共同参画を推進する内容であれば、派遣可能です。
まずはお問い合わせください。

静岡市男女共同参画課 TEL 054 (221) 1349

Book review

図書館司書が男女共同参画の視点で特集記事に関連した本をオススメします。



「おひとりさまの老後」 上野 千鶴子 (法研)

これからの人生をいかに充実させるか、という団塊世代男性の定年後をテーマにした本が多く出版されています。本書は、女性がひとりの人生をどう締めくくするか、自身の後始末までを含めた老後準備の本です。誰もが「最期はひとりになる」ことを前提に、今から着々と老いる準備をしていく—この考え方に潔さを感じます。日々の暮らし、つきあい、お金の問題など、不安材料とその対処の仕方をシビアにつづる中で、秀逸は「介護される側の心得10カ条」。「介護という商品」の賢い消費者になる、という考え方が「他人にお世話されることに慣れていない」女性に浸透していけば、今より明るい未来がみえそうです。(松永 博子)



「ぶたばあちゃん」 マーガレット・ワイルド文 ロン・ブルックス絵 今村 葦子訳 (あすなろ書房)

ぶたばあちゃんと孫娘は仕事をわけあいながら、ずっと一緒に暮らしてきました。ところがある日、ぶたばあちゃんは「なんだか、くたびれちまって…」と昼も夜も眠り続けます。翌日、本を図書館に返し、預金をぜんぶ引き出して、支払いを済ませ、残りのお金を孫娘の財布にしまい…。「したく」を終えると、ふたりで散歩にでかけ、心ゆくまでながめ、耳を傾け、匂いをかぎ、最後のごちそうを楽しみます。その晩孫娘は、小さいころしてもらったように、ぶたばあちゃんをぎゅっと抱きしめて眠りました。ぶたばあちゃんは、元気な時からずっとこの日が来るのを覚悟し、孫娘が困らないように心して暮らしてきたのでしょうか。こんなふうには毅然と最期を迎えられたら、いとしい人の最期に寄り添えたら…。翌朝の孫娘の表情が印象的です。(遠藤 純子)



「恐くないシングルの老後」 吉廣 紀代子 (朝日新聞社)

配偶者や子どもの有無を問わず、今後の日本では高齢シングルの増加は必至。20年前に著者によって『非婚時代』と描かれた結婚制度を超えて生きた女性たち。彼女たちが今、高齢期を迎え、どう自立したのかを50~78歳までの30人の老後設計をルポし、まとめた書。ずっとシングルだった人、離婚経験者、シニア婚をした人など、さまざまな歩みをした人たちが、一人で迎える老後を不安要因のみに目を向けるのではなく、具体的設計を立てプラス志向で動き出している姿に、ある種の「覚悟」を感じます。尊厳死、散骨、遺品整理などの資料とともに、個々人の経済状況など具体的数字が明記され、老後を考える指針となる一冊です。(山本 千秋)

3冊とも女性会館図書コーナーにて所蔵しています。